

Title	アリストテレスの範疇教説とCategoriae(I)
Sub Title	Aristotle's doctrine of categories and the treatise called categories (I)
Author	牛田, 徳子(Ushida, Noriko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1984
Jtitle	哲學 No.78 (1984. 4) ,p.1- 27
JaLC DOI	
Abstract	In this article, I assert the non-authenticity of the treatise Categories, attributed to Aristotle, by pointing to the theoretical inconsistencies of that treatise with Aristotle's doctrine of categories included in some of his authentic works : the Topics, the Sophistical Refutations, the Prior and Posterior Analytics, the Metaphysics. The article is divided into two parts ; in the first of which I concern myself with the author's doctrine of categories in his authentic treatises. I distinguish three levels of knowledge, linguistic, logical and ontological, in which the categories are opposed to, terms and forms (or parts) of speech, to predicables and to being, the most universal and trans-categorial predicate. I conclude that the categories are inter-categorial divisions of the predicate being and are intended to be predicated of all beings in order for these to be represented both in logical predication and in dialectical speech in conformity with the division of categories.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000078-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アリストテレスの範疇教説と
Categoriae (I)

牛 田 徳 子*

**Aristotle's Doctrine of Categories
and the Treatise Called *Categoriae* (I)**

Noriko Ushida

In this article, I assert the non-authenticity of the treatise *Categoriae*, attributed to Aristotle, by pointing to the theoretical inconsistencies of that treatise with Aristotle's doctrine of categories included in some of his authentic works: the *Topics*, the *Sophistical Refutations*, the *Prior* and *Posterior Analytics*, the *Metaphysics*.

The article is divided into two parts; in the first of which I concern myself with the author's doctrine of categories in his authentic treatises. I distinguish three levels of knowledge, linguistic, logical and ontological, in which the categories are opposed to terms and forms (or parts) of speech, to *predicables* and to *being*, the most universal and trans-categorical predicate. I conclude that the categories are inter-categorical divisions of the predicate *being* and are intended to be predicated of all beings in order for these to be represented both in logical predication and in dialectical speech in conformity with the division of categories.

* 慶應義塾大学言語文化研究所教授 (哲学)

はじめに

Corpus Aristotelicum の冒頭の作、*Categoriae* の真作性に対する疑惑は、I. Husik (*The Categories of Aristotle, Philosophical Essays*, 1952) と L. M. de Rijk (*The Authenticity of Aristotle's Categories, Mnemosyne Ser. IV. 4*, 1951) の真作説によって鎮静化した、と或る本は報告している。⁽¹⁾ それから約三十年たった現在、私は本論でふたたび *Categoriae* に関する疑義を提出してみたい。ただし紙数の制約上、同書の後半部——*Postpraedicamenta* と呼ばれる 10-15 章——は議論の対象からはずすことにする。⁽²⁾ 以後本論で *Categoriae* (*Cat* と略記する) と書くのは、その前半部を指している。

はじめに、作品の真・偽作決定の方法についてすこし述べておきたい。*Cat* の偽作性を絶対的な意味で決定するのは、直接的な証拠がない以上、不可能なことである。したがってその偽作性如何は、真作とみなされる、他のアリストテレスの作品グループとの比較、対照を通じて、相対的な意味において決定されるほかないのは当然なことである。この相対的考証によって私が本論で確立したいのは、他の真正作品⁽³⁾と関連させた場合の *Cat* の理論的な不整合さである。

私が上のような判定方法を選ぶのは、さきの Husik と Rijk がその真作説において取っている方法に対して疑問を持つからである。まず Husik は *Cat* を *Topica* (*Top* と略記する) と比較するのであるが、彼はおおよそ三つの観点から *Cat* を真作と判定する材料を提供している。その一つは、*Cat*, *Top* 両書に見出される表現の共通性、類似性である。この観点は真作判定のためにはまったく役に立たないと思われる。仮に *Cat* が *Top* のあとに書かれた偽作だとすれば、“偽作者”が *Top* の表現を模倣するのはまったく自然なことであろう。逆に、両書の表現に不類似なところがあったとしても、それを *Cat* 偽作性の一つの特徴にするのは薄弱にすぎよう。

第二の観点は、*Cat* の論述を原則論、*Top* の論述を応用論として、両書の間内容上の緊密な関係を確立することである。これは同時に、*Cat* がさきに書かれ、*Top* があとに書かれた時間的先後関係を想定している。この観点は第三の観点と通ずるところがあるが、この観点が採択され難い一つの理由は、*Top* および他の作品のなかに *Cat* への reference がまったく存在しないことである。たとえば、範疇が十箇枚挙されているのは、ただ *Cat* 4. 1b25 と、*Top* A9. 103b22 の二箇所においてであるが、実体範疇をふくめて二箇以上の範疇が並記されているのは、私の知るかぎり、全作品を通じて、およそ七十箇所ある。もし *Cat* が最初期に書かれた原則論であったならば、それらの箇所の、すくなくともいくつかは同書へのなんらかの言及があって然るべきであろう⁽⁴⁾。さらに、仮に *Top* が「応用論」であるとしても、その「原則論」が他に書かれなければならない絶対的な理由はないし、また仮に書かれたとしても、それが現存する *Cat* でなければならぬ理由もないだろう⁽⁵⁾。第三の観点は、*Cat* を不完全、未熟な作、*Top* をより完全、より発展した段階における作として、同一作家の創作活動の異なる時期にあてはめる関係の確立である。この観点は、Rijkが、アリストテレスの後期のものとされている *Metaphysica* (*Met* と略記する) セータ巻との比較、対照において取っているものである。

アリストテレスの思想および作品を発展段階において把える研究動向は、W. Jaeger の研究 (*Aristoteles, Grundlegung einer Geschichte seiner Entwicklung*, 1923) 以来、二十世紀前半を風靡した。私はこの、一見魅力的な方法には疑問を持つ。第一に、真・偽作を見分けるためにこの観点を取るのには方法としてあきらかに誤っている。なぜならそれは作品論を作家論にすり替えているからである。作家論が真作とみなされる作品相互の比較、対照を通じてなされるべきことは当然であろう。第二に、この方法は根拠が薄弱である。なぜならこの方法にしたがうと、作家のさまざまな発言相互の類似性と不類似性を定めるクリテリウムが存在しなくな

るからである。或る発言を初期のものとし、或る発言を後期のものとするには、どの程度の類似性（したがってまた不類似性）がそれらの間にあるのが必要なのか、われわれにはなにもわかっていないのである。第三は、第二から往々にして生じるもので、この方法は question begging に陥りやすいから危険である。しばしば人は、或る作品の制作時期を定めるために、他の作品との対比を求めるとき、その対比をするために、双方の時期的区別を暗黙のうちに求めている。

以上の三つの観点は、以上のような理由で、無視しなければならないと私は考えている。もちろん、Husik は三つの観点のそれぞれが決め手になるとはみなさず、すべてをあわせた総合的な観点から、*Cat* を真作と判定せざるをえない、と考えていたに違いなかるう。しかし、同じように厳密さを欠く傍証をどんなに集めてみても、「疑わしきは罰せず」の原則は守られねばならない。

それゆえ私は、真作とみなされる作品のなかから範疇教説とかかわる論述を取り出し、*Cat* の論述がそれらのどれか一つと整合的であるならば、*Cat* を真作とみなすべきであるし、また、それらのすべてと非両立ないし不整合であるならば、*Cat* を偽作とみなす方がアリストテレス哲学の研究のためには寄与することがいっそう大きいと考えることで、以下のような相対的考証を行なってゆきたい。

I 真作における範疇記述

範疇分類は「存在」*ὄν* の分類か、「述語」*κατηγορία* の分類か、「語」*ὄνομα* の分類か

おそらく、アリストテレスの範疇教説をめぐるさまざまな論議はこのテーマのもとで集約できると思われる。アリストテレスの範疇がなにを基にして分類されたか、という問題自体、古くからさまざまに論議されてきた。⁽⁶⁾しかしそれらの論議がすべて満足すべき成果をあげたとは思われて

いない。しかしながら、アリストテレスの、範疇論ならざる著作のなかで、さまざまな認識レベルにおいて範疇との対比が述べられているのを見出すことができる。それらの箇所における範疇対比は、整理すれば、上のテーマにある三通りの分類の問題とオーヴァーラップしている。以下言語・言論レベル、論理学レベル、存在論レベルの順に範疇対比を取上げてゆくことにする。

(1) 言語・言論レベルの範疇対比

(a) *ποσαχῶς λέγεται* (どれだけの仕方語られるか) と範疇

われわれが話しをしたり、話しをするために考えたりするとき、その対話や推論の対象——事物・事象・事柄 (プラグマ)——が、同じ語(名)によっていくとおりに語られるか——他の表現では、ホモーニュモン (同名異物) かどうか——、をめぐる問題が主として *Top A15* (cf. *ibid.* A13, 18) のなかで論じられており、また、対象がそのように語られる語法 *λέξις* をめぐる問題が主として *Sophistici Elenchi* (*SE* と略記する) 4, 19, 22 (cf. *ibid.* 6, 7, 16, 17) のなかで論じられている。それらの文脈のなかで、範疇を指す表現が二度現われている。その一つは、*Top A15. 107a3* 「その名に応じた述語の類」であって、語 *ἀγαθόν* (「善(い)」) をめぐって「能動するもの」「性質」「時」「分量」が区別されている (*ibid.* a6-10⁽⁸⁾)。もう一つは、*SE 22. 178a5* 「述語の類」であって、「何であるか」(実体)「関係」「分量」が参照されている (*ibid.* a7-8)。「述語の類」が範疇を指していることは、*Top A9. 103a20-23* における「……述語の類は数にして十箇ある……」からあきらかであろう (cf. *ibid.* H1. 152a38-39)。

それでは以上の文脈において、語や語法に範疇がどう対比されるかを見てゆく。

それぞれの事柄がいくとおりに語られるか、を区別する能は、われわれがそれを使って正しく推論してゆくために必要な道具 *ὄργανα* の一つであ

るから (*Top* A13. 105a21-24), われわれはそのことによく訓練されていなければならない。ところで、その種の作業は、どんな語が、同じであるのに、いろいろ異なる仕方で語られるか、という事実にかかわるばかりでなく、そう語られることが理に適っていないことを説明できることでもなければならぬ、とアリストテレスは言う。たとえば、語 ἀγαθόν (「善(い)」)が、「正義 δικαιοσύνη や勇氣 ἀνδρεία は ἀγαθόν である」と語られる場合と、「身体を絶好調にするもの εὐεκτικόν や健康にするもの ὑγιαίνόν は ἀγαθόν である」と語られる場合とでは語られる仕方が異なるのは、一方正義や勇氣はそれら自体が或る「性質」であるからそのように語られているのに、他方は或るものに「能動(作用)するもの」であるからそのように語られているのだ、と説明できるようにしなければならない (*ibid.* A15. 106a1-8)⁽⁹⁾。以上においてアリストテレスは、語は「述語の類」の区別に適ってつねに語られているわけではないことを指摘している。⁽¹⁰⁾

類似の問題は語法型 σχήματα λέξεως⁽¹¹⁾ をめぐっても現われる。或る語法型を取る語は「(真実には) 同じような仕方で語られないのに、その語法のゆえに同じような仕方で語られるように見える」(*SE* 22. 178a23-24)。たとえば、或る動詞は他の動詞と同じような語法形態 ὁμοιοσημοσύνη を取るが、それらと同じような事柄を表現するわけではない。ὑγιαίνειν (「健康である」) は、τέμνειν (「切る」), οἰκοδομεῖν (「建築する」) と同じ能動形を取るにもかかわらず、或る「能動」を表わさず、或る「状態」を表わす (*ibid.* 4. 166b15-18)。ὄραν (「見る」) は或る行為をなすと同時になしてしまっている——見る(現在)と同時に見てしまっている(完了)⁽¹²⁾——ことばかりか、或る「受動」を表わす (*ibid.* 22. 178a9-16)⁽¹³⁾。また、ἄνθρωπος (「人間」) は名詞形であるにもかかわらず、或る「実体」を表わさず、或る「性質」か「分量」か「関係」かその他を表わす (*ibid.* 178b37-39)。最後の事例は、いわゆる「第三の人間」議論を解決する論拠になるもので、のちに解説されるように、本論のもっとも重要な論点にかかわるものである。い

ずれにしても、以上からは、語は語法型の区別（名詞形、能動形、受動形、現在形、完了形など）に適ってつねに語られるわけでもなく、「述語型」*σχήματα κατηγορίας*（範疇）の区別（実体、性質、分量、関係、能動、受動、状態など）に適ってつねに語られるわけでもなく、さらに語法型の区別と範疇の区別がつねに対応するわけでもないことがあきらかになっている。さきの *Top* の事例にしても、同じ語 *ἀγαθόν* には、「正義」や「勇氣」について語られる場合は、それらが名詞であるのに対応して名詞（「善」）であり、他方では「身体を絶好調にするもの」や「健康にするもの」が本来形容詞であるのに対応して形容詞（「善い(もの)」であるという品詞の区別があるはずであろう。しかもその名目上の区別は範疇上の区別（性質と能動）には対応するところがない。

それゆえ、アリストテレスにとって、対話し、推論してゆくために必要な道具の一つは、範疇の分類に適った語および語法の使用である。それを欠くなら、人は明晰さを欠き、誤謬推論に陥る危険がある。そればかりか、それを心得ていることは、「推論が（たんに）名目的でなく、事物それ自体に即して成立するために有用である」(*Top* A18. 108a18-37)⁽¹⁴⁾。「いやしくもわれわれが「述語の類」を所有している以上は、同じならざるものが同じような仕方で語られることに基づく（誤った）議論にどう対処すべきかはあきらかである」(*SE* 22. 178a4-6)。「なぜならどのようなものが（真実）同じような仕方で語られ、どのようなものが（真実）異なった仕方で語られるかを分別するのは難しいことだからである。けだしそのことをなす能ある者は、真理を観る行為にほとんど近付いており、なにを首肯するかを最大に心得ているからである」(*ibid.* 7. 169a29-33)。

(b) *praedicabilia* と *praedicamenta*

正しく推論するために必要な、第一の道具は、命題 *πρότασις* を立てることである (*Top* A13. 105a22)。命題とは言論の要素 *ἐξ ὧν οἱ λόγοι*、つ

まり対話において相手にその承認を求め、それから議論が出発するところの前提 *πρότασις* である。さきのホモーニュモンにおける異義の区別も、それから命題が作られる素材にかかわる問題である (cf. *ibid.* 105a25-33). ところで、命題の「類」(*ibid.* 105a20) はアリストテレスによれば四つある。すなわち、定義、類、特性、付帯性である (*ibid.* A4-5). それらは、それぞれ話題の対象について語られることによって命題を構成する述語の類になっているのであるから、それらを命題述語の類と呼んでよい。のちに中世では、それを、範疇である「述語の類」と区別するために *praedicabilia* と呼び、範疇を *praedicamenta* と呼ぶ伝統が作られたのである⁽¹⁶⁾。中世の人々がこの二種類の「述語の類」を区別したのは正しかったと思われる。なぜならアリストテレスは *Top* A9 で両者を対比させているからである。

彼はまず、「述語の類」(範疇) を十箇枚挙して (103b20-23), それらに「命題述語の類」をつぎのように関連させる。少々長くなるが、きわめて重要な箇所であるので、全文を引用する。

「付帯性、類、特性、定義はつねにそれら範疇の(どれか)一つのうちに見出されることになる。なぜならそれら(四種の述語)を使って作られる命題はすべて、「何であるか」(実体)か「分量」か「性質」か、その他の述語(範疇)のどれかを表現するからである。

そこからあきらかになるのは、何であるかを人が表明するとき、「^{ウーシフ}実体」を表明する場合、「分量」を表明する場合、「性質」を表明する場合、その他の述語(範疇)のどれかを表明する場合があるということである。すなわち、(1) (或る)人間が話題になっているなら、その話題になっているものは「人間である」とか「動物である」と言う場合、人は何であるかを語り、かつ「^{ウーシフ}実体」を表明する。(2) また (或る) 白い色が話題になっているなら、その話題になっているものは「白である」とか「色である」と言う場合、彼は何であるかを語り、かつ「性質」を表明する。(3) また同様に (或る) 一ペーキュスの大きさが話題になっているなら、その話題になっているものは「一ペーキュスの大きさである」と言う場合、彼は何であるかを語り、かつ「分量」を表明する。他の場合も同様である。

なぜなら、そのような〔述語〕のそれぞれは、(i) 自らについてそれ自体が語

られる場合も、それについて類が語られる場合も、何であるかを表現するけれども、(ii) (それ自体とは)異なるものについて語られる場合は、「何であるか」(実体)を表現せず、「分量」か「性質」か、その他の述語(範疇)のどれかを表現するからである」(103b23-104a2)。

この箇所ですでに指摘しなければならないのは、釣括弧でかこんだ「何であるか」と、傍点を付した何であるかを区別しなければ混乱が起こるということである(II・(1)参照)。前者の「何であるか」は範疇の第一位にある「実体」を指し、後者の何であるかは、(1) 実体的なもの(人間)であれ、(2) 性質的なもの(白)であれ、(3) 分量的なもの(ペーキュス)であれ、その他のなんであれ、インター・カテゴリー的に与えられる任意の対象の、普遍定義や類によって表現される本質を指す⁽¹⁶⁾。それゆえ、まずここでは二種類の“何であるか”——「実体」である「何であるか」と、言論的な普遍述語が表わす何であるか——が対比されている。この区別はいずれ見るように、論理学においても要求される((2)参照)。

それでは、アリストテレスがかの箇所で論じていることを考えてみる。その第一は、人ほどの範疇に属するどんな対象についても定義、類、特性、付帯性から語ることができる、ということである。そのかぎり、命題述語はインター・カテゴリー的な妥当性を持つ。しかしこの特徴は命題述語がトランス・カテゴリーであることも、ノン・カテゴリーであることも意味していない。なぜなら第二に、或る特定の範疇に属するものの本質を語る場合、人は与えられた当の対象が属する範疇を踏み越えないことになっているからである((1)(2)(3)と(i))。つまり、たとえば性質範疇に属する或る白さが与えられたなら、それをそれ自身の種の名で指す場合も、その類の名で指す場合も、人はつねに同一範疇のなかからそれらの述語を求めなければならない(*Top* 41. 120b36-a9)⁽¹⁷⁾。それでは第三に、範疇を踏み越えた場合どうなるか。

まず、その場合第一に主張された命題述語の機能が正しく使用されなくなる。つまり、同じ対象について定義、類、特性、付帯性からそれぞれ

シユノーニユモース
 一 義的に語ることができなくなる。たとえば述語「白(い)」が、或る白い性質について「それは白である」と語られる場合と、或る白鳥について「それは白(いもの)である」と語られる場合、一方では対象の何であるかを表現し、他方では付帯性を表現している。しかし白い性質について語られる場合は、人はつねにその付帯性表現機能を切り捨てておかねばならないし、他方白鳥については、そねにその本質表現機能を切り捨てておかねばならない。第三の問題はしかし、観点を変えれば、範疇を異にする対象についての、同じ述語の派生義的機能をあきらかにする。白い性質について語られる本質述語「白」と、白鳥について語られる付帯性述語「白(い)」はシユノーニユモースに語られないからといって、ホモニユモースに語られているわけではない。なぜなら「白」の原義(たとえば, *Top* Γ5, 119a30「視覚を分散させる色」)は白鳥についても派生的に保たれているからである。⁽¹⁸⁾むしろ、或る性質の何であるかを表現する述語「白」は(2)と(i)、^{パローニユミア}転義を施されることによって、その性質を持つ異なるもの(白鳥)について、その「性質」を表現することになる⁽¹⁹⁾(ii)。これは命題述語が範疇述語に還元されることを表わしている。

命題述語はその主語を範疇上無差別的に取ることができるから、われわれはそれを使って他人とどんな事柄についても話題を共にし、言論を共にすることができるという利点がある。しかしその言論の一義性は範疇区分によって保たれる。換言すれば、命題が正しく立言され、推論において使用されるのは、それが範疇区分を前提するからである。さらに命題述語の、範疇への還元性(再編成)が可能であるのは、アリストテレスが引用箇所のはじめに述べているように、それがつねに範疇区分のなかで採択されているからにほかならない。

しかし、範疇述語への命題述語の還元に関して一つの問題が残る。引用箇所の(ii)を見てみよう。「そのような述語のそれぞれは、それ自体とは異なるものについて語られる場合は、「何であるか」を表現せず、「分量」

か「性質」か、その他の範疇のどれかを表現する」。この文章は「何であるか」(実体)を表現する命題述語のことを述べていない。つまり問題は、引用箇所(1)「或る人間が話題になっているなら、その話題になっているものは「人間である」とか「動物である」と言う場合、人は何であるかを語り、かつ「実体」を表明する」ことが、「実体」である「何であるか」を表明するかどうか、ということである。アリストテレスがそれをはっきり否定していることは、前項(a)で、語法型の問題に関してすでに見たとおりである。「人間」とか、すべて共通な〔名〕は、或る「これ」(実体)を表現せず、或る「性質」か「分量」か「関係」か、それらの類いのどれかを表現する」(SE 22. 178b37-39, cf. 179a8-10)。なぜなら、カリアスが話題になるとき、「それは人間である」と語って、当の実体の何であるかを表明したとしても、当のカリアスとは異なるソクラテスについても同様に語ることができるからである。それゆえどんな普遍述語も実体を表現しない。もし語法の類似性によって普遍が実体を表現すると認めたならば、人は、カリアスとその述語「人間」の両者に共通な第三の「人間」が生じるのを防ぐことができないのである⁽²⁰⁾。それゆえ、「実体」に関してだけ、命題述語の範疇還元は不可能である。Topの何であるかの本質述語は、(i)「実体」である「何であるか」とは独立に(混同するならば「第三の人間」背理が生じる)、インター・カテゴリーアルに成立するか、(ii) 実体の「属性」のどれかに還元されるかのいずれかである。

アリストテレスは *Met* においては、(i) を消去し、(ii) を残す姿勢を取る。それは範疇教説の観点からすれば正統であると言わなくてはならない。「共通な述語になるもののどれも或る「これ」(実体)を表現せず、「このような」(属性)を表現する。さもなくば、多くの難点のうち、とりわけ「第三の人間」が結果する」(Z13. 1039a1-3, cf. B6. 1003a8, K2. 1060b20)。しかしこの姿勢はただちに、実体の本質は定義可能か否かのアポリアに突きあたる(Z13. 1039a14-21, cf. Z4. 1030a5, Z5. 1031a11-14, 48.

1017b21-22). そしてアリストテレスは結局、個別的な感覚実体に関しては、それが定義不可能であることを認めるにいたる (Z15. 1039b27-1040a7).

しかしアリストテレスは、実体に本質があることはもとより、実体に普遍定義があることも否定していないである。彼が否定しているのはただ、実体を普遍的に定義したとしても、それでもってただちに実体の本質が認識されたとみなすことである。それでは類と種差とよりなる実体の定義がなにをあきらかにするかを考えてみる。人間の定義が「二本足の動物である」と語られるならば、それは、人間が「或るしかじかような(性質の)動物である」ことをあきらかにしている。すなわち種差は「性質の一種である」(*Met* 414. 1020a33-34, *Top* 42. b16-17)。それでは、人間の類である動物とは何であるかを定義して、「感覚の能ある生物である」と語られるならば、それは、動物が「或るしかじかような生物である」ことをあきらかにしている。以下同じようにして人間の最大の類にたったなら、もはや十分な定義は得られない (cf. *Analytica Priora* (*Apr* と略記する) A27. 43a36-39⁽²¹⁾)。結局、人間の普遍定義は、人間が持つさまざまな「性質」をあきらかにしているだけである。

(2) 論理学レベルの範疇対比——τὰ γένη κατηγοριῶν (述語の類) と 範疇

アリストテレスは *APr* A37 で、「AがBにある」ὕπαρχειν τόδε τῷδε や、「AがBについて真である」ἀληθεύεσθαι τόδε κατὰ τοῦδε といった論理的命題は述語が分類されたと同じだけの仕方を取られるべきである、と述べている (49a6-8)。『分析論』のなかで範疇が参照されているのは *APo* A22 においてである。そこではアリストテレスは以下のように述べている。「また述語の類は(その数が)かぎられている。すなわちそれは「性質」か「分量」か「関係」か「能動」か「受動」か「場所」か「時」かである」

(83b15-17). ここでは範疇の第一位のもの、「実体」が欠けている。しかし先行する文章を見れば、なにが最初に納まるべきか察しがつく。「それぞれのものについて述語づけられるのは、或る「性質」か或る「分量」か、その類いのどれかを表現するものか、それとも本質^{ウーシフ}のうちにくまれるもの（複数）かである。そして後者は（その数が）かぎられている」（b13-15）。さらにもっと先には、「一つのもものが一つのものについて述語づけられるとき、（その述語づけは）(1) 何であるかのうちにあるか、(2) 「性質」か「分量」か「関係」か「能動」か「受動」か「場所」か「時」であることかである」と述べられている（83a21-23）。したがって「本質^{ウーシフ}のうちにくまれるもの」ないし「何であるかのうちにくまれるもの」が「実体」に代ってその位置を占めているのはあきらかである、「何であるかのうちにくまれるもの」とは定義のことである。「もし定義づけが可能であるならば、換言すれば、“何であるか”が可認識であるならば……何であるかのうちにくまれる述語は（その数が）かぎられている」（*ibid.* 82b38-83a1）。したがって、ここでは述語の類の第一位を占めているのは、「実体」を表現するインター・カテゴリーな何であるか（さきの *Top A9* の引用句における (1)）である。

それでは、以上のような述語の類において、なぜ「実体」が実体の定義に取って代わられているのか見てゆく。アリストテレスは *APo A22* の文脈のなかでつぎのように説明している。「さらに、(1) 本質^{ウーシフ}を表現するものは、それが述語づけられるところのもの（主語 B）について、まさにそれ（A）か、まさに或るそれ（或る A、または A の一種）であるところのもの $\delta\pi\epsilon\rho\ \acute{\epsilon}\kappa\epsilon\iota\nu\o\ \eta\ \delta\pi\epsilon\rho\ \acute{\epsilon}\kappa\epsilon\iota\nu\o\ \tau\iota$ を表現する。他方 (2) 本質^{ウーシフ}を表現せず、（それ自体とは異なる）他の基体——まさにそれ（F）か、まさに或るそれ（或る F、または F の一種）であるところのものでない基体（B） $\delta\ \mu\eta\ \acute{\epsilon}\sigma\tau\iota\ \mu\eta\tau\epsilon\ \delta\pi\epsilon\rho\ \acute{\epsilon}\kappa\epsilon\iota\nu\o\ \mu\eta\tau\epsilon\ \delta\pi\epsilon\rho\ \acute{\epsilon}\kappa\epsilon\iota\nu\o\ \tau\iota$ ——について語られるものは付帯性である」（83a24-28）。(1) は述語の類の第一位のものを指し (*ibid.* a30

「人間はまさに動物（の一種）であるところのものである」）、(2) は第二位以下のものを指す (*ibid.* a28-32 「たとえば「白(い)」は人間について語られる。なぜなら人間はまさに白か、まさに或る白であるところのものではないからである……およそ^{ウーシア}本質を表現しないものはなんらかの基体について語られるべきであって、(それ自体とは)異なるものであることなしに白であるような或る白があるはずもない)。したがってここでは、「実体」の代わりに類が取られ、「性質」以下の属性の代わりに付帯性を取られている。付帯性はさらにつぎのように述べられている。「……何であるか(の述語)でないものは自らについてそれら自体が述語づけられることはない。なぜならそれらはすべて付帯性だからである。ただしそれらの或るものは自体的 *καθ'αυτό* にあり、或るものはそれは異なる仕方においてある」(*ibid.* 83b18-20)。したがって、述語の類でもってアリストテレスが考えていたのは、実体について述語づけられる類と自体的付帯性と付帯性の三種である。

以上の述語がどういう性質のものであるかは、*APo* A4 における「自体的なもの」*τὰ καθ'αυτά* の分類を参照すれば理解される。

「自体的なものであるのは、(a) 何であるかのうちにふくまれるものである。たとえば「線」は三角形に(ふくまれて)あり、「点」は線に(ふくまれて)ある。なぜならそれら(三角形や線)の本質はこれら(線や点)から構成され、これらはそれらの何であるかを語る定義^{プロセス}のうちにふくまれるからである。また(b) それら(基体)に(述語として)あるもののうち、それら(基体)自体がこれら(述語)の何であるかを語る定義^{プロセス}のうちにふくまれるところの(これらの)ものである。たとえば、「直と曲」は線に(述語として)あり、「奇と偶」は数に(述語として)ある……そして一方「線」、他方「数」はこれらすべての何であるかを語る定義^{プロセス}のうちにふくまれる。

それに対して、(a)、(b)のいずれの仕方でもあらぬものは付帯性である。たとえば「教養(的)」とか「白(い)」である」(73a34-b5)。

自体的述語(a)は基体が含意する類に相当し、(b)は基体を含意する自体的付帯性に相当する。それに対して基体がそれを含意することもなく、基

体を含意することもない述語は文字どりの付帯的な述語である。⁽²³⁾そして、論証推論の命題は (a) と (b) のタイプの述語から取られる (Apo A6. 74b5-12, A22. 84a11-14). 論理的述語は、主語に対してなんらかの必然的、本質的^{ロゴス}な関連にある述語にかぎられる。ここに命題における、主語に対する述語の厳密な関連性が規定されている。

しかしながら、Apo A4 の「自体的なもの」の分類はまだ続く。

「さらに、(c) 他のなんらかの基体について語られることのないものである。たとえば「歩行する」は (それ自体とは) 異なるもの (たとえば、歩行する動物—筆者) であることによって「歩行する(もの)」であり、また「白(い)」も同様であるのに対して、実体^{ウシツ}、すなわちおよそ或る「これ」を表現するものは (それ自体とは) 異なるものであることなく、まさにそれであるところのものである。したがって一方の、基体についてあらぬものを私は自体的なものと言い、他方の、基体についてあるものを付帯性⁽²⁴⁾と言う」(73b5-10)。

この自体的なもの (c) が (a) と異なることは、Met 418 における「自体的なもの」の分類を参照すればはっきりする。「自体的なものは多くの仕方で語られねばならない。すなわち、自体的なものの一つは、それぞれのものの「何であるか」である。たとえば、カリアスは彼自体に即してカリアスであり、カリアスの「何であるか」である。他の一つは何であるかのうちにふくまれるものである。たとえば、カリアスは動物である。なぜなら「動物」は彼の定義^{ロゴス}のうちにふくまれるからである。すなわち、カリアスは或る動物だからである」(1022a25-29)。「さらに、その原因がそれ自体に他ならぬものである。すなわち、「人間」には多くの原因 (その定義の要素—筆者)—「動物」「二本足(の)」—がある。しかし、人間はそれ自体に即して人間である」(ibid. a32-35)。ここでは、「カリアスはカリアスである」「人間は人間である」といった、同語反覆^{トートロジーカル}的な表現と、「カリアスは或る動物である」「人間は二本足の動物である」といった、定義的な表現が対比されている。定義的述語は主語との同一性表現を意図しているから一種の自己述語である。すでに見たように、「自らについてそれ自

体（の種）が語られる場合も、それについて類が語られる場合も何であるかを表現する」(Top A9. 103b36-37) けれども、「何であるかの述語でないものは自らについてそれら自体が述語づけられることはない」(APo A 22. 83b18-19) のである。しかしトートロジカルな述語は主語の何であるかを表現することなく、ただ主語の同一性を表現しているだけである。アリストテレスが、このような何であるかを表現しない自体的なものが「それぞれのものの「何であるか」である」と主張するとき、彼は表現不可能な実体本質のことを考えていたと思われる。それは、^{ウーシア}「実体、すなわちおよそ或る「これ」を表現するものは、それ自体とは異なるものであることなく、まさにそれであるところのものである」(APo A4. 73b7-8) と、さきのように述べられるほかないものである (cf. Met Γ4. 1007a26-27, Z4. 1030a3-6⁽²⁵⁾).

自体的なもの (c) が以上のような性格のものであるならば、それはまず、主語の措定がそれから取られるところのものであろう。「それは他のなんらかの基体について語られることのないものである」(APo A4. 73b5-6). なぜなら、主語が措定されなければ、主語のそれであることが自体的述語 (a) によって定義づけられることもないし、自体的述語 (b) が主語に述語としてあることも、その何であるかが定義づけられることもないからである。しかし推論においては、主語はインター・カテゴリーアルに取られうる。すでに見たように、三角形も線も数も、人は特定の命題の主語にそれらを立てることができる。しかしその類いの主語はつねに「それ自体とは異なるものであることがない」(ibid. b8) わけでないならば、それは「まさにそれであるところのものである」とトートロジカルに語られる必要もないし、それに実体本質的な「何であるか」を想定する必要もない。それはただ、推論の要求に応じて定義づけられればよい。したがって本来的な主語となるべきものは、そのような相対的主語を述語に置き換えていった結果、「(もはや) そのものは他のどんなものにも (述語として) あらず、

他のものがそれに（述語として）あるところの最終的なもの」（*APo* A21. 82a39, cf. A19. 81b30, 39; *APr* A27. 43a25-29）に求められるはずである。実体の特徴としてもっとも強調される主語的性格はそのような第一義的な意味において取られなければならない（*Met* Δ8. 1017b23-24, cf. Γ4. 1007a33-b1, Z3. 1029a8-9; *Phys* A2. 185a31-32, A7. 190a36-b1）。

本項のはじめに与えられた述語の類の記述は、実体的主語について語られる自体的述語の系列（最近の述語から、最大に普遍的な最遠の述語にいたる）が、実体の何であるかにふくまれる自体的述語の系列であれ、実体の属性を表現する自体的述語の系列であれ、有限であり、またそのような系列自体の数が範疇の分類にしたがって有限である、という議論の文脈のなかにある。論理的述語が自体的述語 (a) と (b) から取られるのであるならば、それらはすべて以上のような一定数の述語の類のうちにあらねばならない。換言すれば、すべての論理的述語は一定の述語の類に応じた全系列を構成する。それゆえ、論理命題がそれに還元されるべき述語の分類は、(1) 実体の何であるか（定義）を表現する述語と、(2) 実体に必然的に付帯する属性のすべてを表現する述語にかぎられる。そこには本来的な主語である実体のトートロジカルな「何であるか」は見出されない。なぜなら同語反覆^{トートロジー}は推論においてなんの役にもたたないからである。けだし、すでに見たように、「実体」に関してだけ、命題述語の範疇還元は不可能である。しかし実体の何であるかと、実体の属性が実体範疇と非実体的範疇を前提していることはあきらかである。

(3) 存在論レベルの範疇対比——「存在」と範疇

『形而上学』を見るとき、人は「存在」をぬきにしては範疇を語ることが不可能である。「存在」と範疇がどうかわかるかはそれほど自明なことではないけれども、すくなくとも双方がたがいにかかわりあっていることは、つぎの文章からあきらかであろう。

「存在」は多くの仕方で語られる。すなわち「存在」は或る場合は「何であるか」および或る「これ」を表わし、或る場合は「性質」か「分量」か、その類いの他の述語（範疇）のそれぞれを表わす（*Met* Z1. 1028a10-13, cf. E2. 1026a36-b1, N2. 1089a7-9; *De An.* A5. 410a13-15）。

「述語の型式（範疇）が表わしただけのものが自体的に「ある」と語られる。すなわち、述語の型式はそれが語られると同じ数の仕方で「あること」を表わす。そこで述語のうち、或るものは「何であるか」を表わし、或るものは「分量」を表わし、或るものは「関係」を表わし、或るものは「能動」か「受動」を表わし、或るものは「場所」を表わし、或るものは「時」を表わすのであれば、「あること」はそれらの各々と同じことを表わす（*Met* Δ7. 1017a22-27）。

以上の引用文のなかでアリストテレスは、存在はなにかがこれこれと述べられるだけの数の仕方に対応し、範疇はなにかがこれこれであるだけの数に対応することで、「存在」と全範疇は完全に一致すると主張していると思われる。彼によれば、「存在」は「一」とともに最大に普遍的な述語である（*Met* I2. 1053b20-21, cf. Γ3. 1005a27-28; *Top* Δ6. 127a27-28, 33）。それゆえ、彼がしばしば「存在の類」τὰ γένη τοῦ ὄντος (τῶν ὄντων) と「述語の類」τὰ γένη κατηγορίας (τῶν κατηγοριῶν) を同じように扱うのは自然なことである。

しかし、「存在」が「一」とともに「あらゆるものに伴うもの」、すなわちどんなものにも無差別的に述べられる述語であるのは、それが類でもなく（*Met* I2. 1053b22-23; *Top* Δ6. 127a27-34）、事物の本質^{ウーシヤ}でもない（*Met* Z16. 1040b18-19, cf. I2. 1053b24-1054a13）からである。たとえば、「一人の人間」と述べても、「あるところの人間」と述べても、「人間」と述べても同じことであって、「一」と「存在」は、「人間」とは異なるなにごととも付け加えることはない（*Met* Γ2. 1003b26-27）。そのことは、「存在」や「一」によって述べられるところのものが、実体であろうと、性質であろうと、分量であろうと変わりはない（*ibid.* I2. 1054a16-18）。つまり「存在」述語はそれ自体としては、それがひとしく述べられる一切のものを、一義的にであろうと多義的にであろうと括るような一定の内容を持ってい

ないのである。それゆえ、範疇の分類の根拠は「存在」のうちに求められない。

範疇区分はむしろ範疇間において求められている。

「存在」が多くの仕方で語られるとは、どんな存在も一つの原理との関係で語られることにはほかならない。すなわち、その或るものは実体であるがゆえにあると語られ、或るものは実体の受動であるがゆえにあると語られ、或るものは実体への生成か（それからの）消滅か、（実体の性質の）欠除か性質か、実体に能動するものか、（それを）産み出すものかであるがゆえに、或いは以上の、実体との関係において語られるもののどれかの否定か、実体そのものの否定であるがゆえにあると語られる。それゆえ非存在をも「非存在である」とわれわれは言うのである」(*Met* Γ2. 1003b5-10). 「存在」はこれだけ多くの仕方で語られるけれども、それらのうちで第一の存在は「何であるか」であって、これこそ実体を表わしている……他のものはそのような（第一の）存在の分量であることによって、性質であることによって、受動であることによって、或いはその類いの他のものであることによって、あると語られる」(*ibid.* Z1. 1028a13-20). 以上のように、「実体」以外の範疇は、実体に対するさまざまな非対称的關係性 $\pi\rho\acute{o}s\ \tau\acute{o}\ \epsilon\nu$ によって定められている。

「実体」が範疇のうちで第一のものであり、他の範疇よりすぐれた存在であるのは、他の範疇的述語のうちに実体の意義^{ノゴス}がふくまれているからである。たとえば、「歩く」はそれ自身だけではあるとは言えず、実体から離れて存しえない。ただ「歩くもの」のように、一定の基体を含意する複合的な述語であるかぎり、非実体的なものもあると言われうる。それに対して実体だけは他のどんな意義も付加されずに存在するから、端的にあると言われるのである (*Met* Z1. 1028a20-31, cf. Z4. 1030a21-27, Θ1. 1045b27-31). 範疇区分が各範疇の存在度合を決定しているのはあきらかである。

それでは「存在」の方は範疇にどうかかわるか。アリストテレスはつぎのように述べている。

「およそどんなものでも、可知的質料であれ可感的質料であれ、質料を持たなければ、それぞれがただちに「まさに或る存在であるところのもの」であり、同様に「まさに或る一であるところのもの」——これ（実体）、性質、分量——である。それゆえ、それらの定義には「存在」も「一」もふくまれない。そしてそれらの本質 *tò tí t̄n eĩvai* もただちに或る存在であり、同時に或る一である。それゆえ、それらのどれにとっても、その（或る）一であることの原因も、その或る存在であることの原因も、それ自体とは異なるものでない。なぜなら、それぞれがただちに或る存在、或る一であるからであって、「存在」という（普遍的）類、「一」という（普遍的）類にふくまれているからでもなければ、「存在」と「一」が個々の存在、個々の一とはべつに（イデアのごとく一筆者）離れてあるからでもない (*Met* H6. 1045a-36-b7, cf. I2. 1054a13-16; *Phys.* A3. 186a32-187a6).

ここでは範疇のそれぞれが、存在、一と同一であることが強調されている。「存在」と「一」は、実体の何であるかを語る定義のうちに類がふくまれるような仕方でそれらの述語になっているわけでもないし、実体の属性の何であるかを語る定義のうちに実体が付加的にふくまれるような仕方でそれらの述語になっているわけでもない。各範疇の本質はまったく平等に、存在、一と等値である。「人間」も、「白」も、「ペーキュス」も、「歩く」も、ひとしく自体的な存在である (cf. *Met* Δ7. 1017a22-23)。存在が範疇別に不平等に配分されるのがインター・カテゴリアルな事態にすぎないのに対して、「存在」そのものは全範疇にわたってトランス・カテゴリアルに述語づけられる。「存在であるかぎり」 *ἢ ὄν*, 全範疇が存在論の対象になるのは当然である (*ibid.* Γ2. 1003b11-16).

それゆえおそらく、「存在」が分類された結果範疇が得られた、と言うべきでなく、範疇が分類された結果として「存在」が多くの仕方で語られることになった、と言うべきであろう。換言すれば、存在の分類が範疇なのではなくて、範疇が存在の分類なのである。

範疇はその名「カテゴリーア」が意味しているとおり、一種の述語であ

ると言ってよい。それは、「存在」、「一」がすでに見たような仕方で一種の述語であるのと同じ意味においてでなければならない。なぜなら範疇はそれぞれが存在、一と同一であったからである。そのかぎり範疇は、たんなる命題を構成する項としての語でも、また命題の論理的主語でも述語でもない、と言うべきであろう。そのかぎり、と私が言うのは、存在論レベルに範疇が位置づけられるのがその身分として本来的であるからには、ということである。しかし「存在」と「一」がどんなものにも述語づけられると同じように、範疇はそのすべてでもってどんな存在にも述語づけられるように意図されている。その場合の述語づけは当然のことながら範疇区分にしたがって、インター・カテゴリーアルになされる。或る存在が第一義的な実体として語られるならば、それは必然的に他のものの基体であるのだから論理的には主語の位置を占め、その意義は端的であるのだからトートロジカルに自己述語によって表現されることになる。またもし或る存在が第二義的な属性の一つとして語られるならば、それは他の基体についての述語の位置を占め、その基体のなにごとかを表現することになる。それゆえ、いままで見てきたように、範疇分類は、どんな存在も主語または述語として正しく述定のうちにおかれ、したがってまた語として正しく表現されることを規制するように意図されている。そのかぎりアリストテレスにとって範疇は語法や述定の終極的な分類でもあろう。

最後に、範疇はなにを基にして分類されたか、という問題に関しては、以上考察してきたかぎりでは、それは語を基にしても、命題の主語と述語を基にしても、存在を基にしても作られたものではない、と結論できると思われる。むしろ、アリストテレスの言論理論、論理学、存在論はそれぞれ、範疇分類の上に立って構築される。言い換えるなら、アリストテレスの範疇論はそれら哲学的分野の基礎論——すくなくともその一つ——であると考えられる。したがって、範疇分類は他のどん基準も想定しない、自立的な分類——実体を基準にした相互区分⁽²⁶⁾——であると私は考える。アリ

ストテレスがこのような分類を手掛けた背後には、プラトンのイデア論が先行していたことを私は推定するけれども、その問題は本論の主題からはずれるから、ここでは立ち入らない。 (未完)

注

- (1) *Articles on Aristotle, 3. Metaphysics*, ed. J. Barnes, M. Schofield, R. Sorabji, 1979, p. 181. ただし, Husik の論文は最初1904年に *Philosophical Review* xiii, n. 5 に掲載されたものの34年間学界に無視され続け, 1939年ふたたび *The Journal of Philosophy* xxxvi, n. 16 に掲載され, 死後 1952年に論文集に収録されたものである。彼の論文は80年たった現在でもなお, 新鮮さを失っていない。
- (2) *Cat* は, 範疇を扱う未完の前半部分(1-9章)と, 「対立」「より先」「同時」「運動」「所有」の概念を扱う後半部分にわかれる。強硬な真作論者 Rijk できさえも, 後半部は前半部とはべつの作品であることを推定しているほどであるから (art. cit. p. 159), 前半部だけを論じることは, 方法上なんらの支障もない。
- (3) 本論が援用する真正作品とは, *Topica, Sophistici Elenchi, Analytica Priora et Posteriora, Metaphysica, Physica, De Anima, Ethica Nicomachea, De Sensu et Sensibilibus* である。
- (4) D. Ross は, *Analytica Priora* (A_{Pr} と略記する), A37. 49a7: *δοξαὶ αἰ κατηγορίαι διήρηται*; *De Anima*, A1. 402a25: *τῶν διαίρεσιῶν κατηγοριῶν* が *Cat* を参照しているようだと言うが (*Aristotle's Metaphysics*, 1924, Ixxxii, n. 6), *Cat* を特定しなければならない理由はなにもない。
- (5) *Top* が範疇教説を前提して書かれたのは確かだと思われるが, その事実をもって, *Cat* が *Top* の「原則論」, *Top* が *Cat* の「応用論」と決めるのは早計である。
- (6) 藤井義夫訳, ポーニッツ『アリストテレスの範疇について』昭和5年, 「訳者序」参照。
- (7) アリストテレスの著作のなかの, 範疇を指すさまざまな表現については, S. Mansion, *Notes sur la doctrine des catégories dans les Topiques, Aristotle on Dialectic, the Topics*, 1968, pp. 189-190 参照。
- (8) *Ethica Nicomachea* (EN と略記する), A6. 1096a19ss. では, ἀγαθόν をめぐって「実体」「性質」「分量」「時」「場所」が区別され, その文脈のなか

- に「範疇」*κατηγορίαι* の名が現われている (a29).
- (9) Cf. *SE* 33. 182b13-27 「同名異義性に基づく議論は論過のうちでももっとも愚劣な論法だと思われる。そのなかにはどんな人にも（その誤りが）明白なものがあるけれども……しかし、なかにはもっとも熟練の人さえ見逃すようなものもある。その証拠に、人々はしばしば名に関して論争を惹起こすのである。たとえば、「ある」とか「一つ」は、あらゆるものについて妥当する同じ（一つの）ことを表現するか、それとも（対象別に）異なることを表現するか、という論争である。すなわち、或る人々は「ある」や「一つ」は同一のことを表わすと考えるのに対して、或る人々は、「一つ」や「ある」が多くの仕方でも語られると主張することで、ゼノンやパルメニデスの（存在一元）議論を論破しようとする」。
- (10) *Top* A15 では一般に、「それらの異なる類が上下関係にない」事柄の「同じ名」のさまざまなケースが扱われている。最大に異なる類に属することは、範疇を異にすることである。Cf. *Met* 428. 1024b9-16, I3. 1054b28-30.
- (11) 語法型とは、品詞（名詞、動詞、副詞など）の語形、名詞の男性・女性・中性語形、格語尾形、動詞の時制語形、能動・受動語形などを指すもので、形態分類の基本的ないくつかを押えている。
- (12) これは、或る行為が行われている（進行している）とき、その間のどんな時間を取ってみてもその行為が充分である（完了している）ことであって、アリストテレスはそのような特徴を、見ること、思惟すること、よく生きること、幸福であること、快を感じることなどに観察する。Cf. *Met* 06. 1048b23-27; *De Sensu et Sensibilibus* 6. 446b2; *EN* K4. 1174a14-19.
- (13) 感覚は一種の受動能力とされる。Cf. *De An.* B5. 418a3-6, B12. 424a17-24.
- (14) Cf. *SE* 16. 175a5-12 「(争論的議論は) 二つの理由で哲学のために有用である。第一は、この種の議論は多くの場合、語法に依拠して生じるのであるけれども、それは、それぞれのものがいくとおりに語られるか、すなわち事柄においても名においても、どのようなものが（真実は）同じような仕方でも生じ、どのようなものが（真実は）異なる仕方でも生じるかを判別するために人をいっそう有能な状態に育てるからである。第二には、自分自身で行なう探求のためにも有用である。なぜなら他人によってやすやすと論過に陥らしめられ、またそのことをさとらない者は、自分自身によって同じことを犯すのが往々だからである」。
- (15) Cf. J. Gredt, *Elementa Philosophiae Aristotelico-Thomisticae*, 1932, pp. 120-121.

- (16) Cf. *Top* A5. 101b38 「定義は何であるかを表現するロゴス (名, 句, 文) である」; *ibid.* 102a31-34 「類は, 種の上では差異を持つ多くのものについて, 何であるかのうちで述語づけられるものである. 何であるかのうちで述語づけられるものとは, 提起されたものが何であるかと問われたとき, 人がそれを与えるのに妥当なものである, とせよ」.

Top に現われる *τί ἐστιν, τὸ τί ἦν εἶναι* (何であるか) や *οὐσία* (本質) の語は範疇の「実体」と同一義に扱われてはならない. それらはしばしば, 言論上のあらゆる対象の定義可能な本質を指している. そのかぎり *Top* はソクラテ斯的ディアレクティケーの伝統を踏むと言えよう (cf. *Met* M4. 1078 b17-30). *Top* における *οὐσία* の使用については拙論「*Categoriae* と *Topica* の比較研究——*Cat.* 1a1~3b23 をめぐって——」(慶応義塾大学言語文化研究所紀要第14号1982年) pp. 211-212 参照.

- (17) Cf. *EN* A6. 1096a28-29 「仮に「善」*ἀγαθόν* が普遍であったなら, それはすべての範疇のうちで語られることはなく, ただ一つの範疇のうちで語られることだろう」. それゆえ, 前項 (a) で見たように, 同名異義的な述語として *Top* で扱われた「善」は, どんな範疇のうちでも語られる「存在」や「一」と同じように, トランス・カテゴリアルに語られる述語であろう (I・(3) 参照).

- (18) Cf. *Top* B2. 109b4-12 「種について, 類からの派生義的な述語づけはけっして語られない. 種について類はすべて一義的に述語づけられる. なぜなら種は類の名も意義も受け入れるからである. そこで, 人が「白は色づけられている」と語ったならば, 彼は派生義的に語ったわけだから, 述語を類として与えていない……他方, 「色づけられている」のは (白とは異なる) 他の多くのものである. たとえば, 木材, 石, 人間, 馬がそうである. したがって彼が (「色づけられている」を白について) 付帯性として (誤って) 与えたことはあきらかである」(注 (19) 参照). ここでは, 種についての類述語と付帯性述語の区別が語られているけれども, 同じことは種の下にあるもの (個) についての種述語と付帯性述語についても言えよう.

「レウコン」が同名異義的に語られる場合もある. それは, たとえば色についてと音声について述べられる場合である. この場合, 語は形相を異にする (*Top* A15. 106a27), 換言すれば語意を異にする——一方では「これこれのような色」を意味し, 他方では「聞こえやすい (はっきりした) 音声」を意味する (cf. *ibid.* 107b1-2)——, 感覚の証言が異なる——一方では視覚によってわかり, 他方では聴覚によってわかる (106a30-32)——, 「述語の類」を

異にする——一方は物体の或る色（性質）であり，他方は音声^{パロニキモース}が聞こえやすいこと（能動）である（107a12-13）——からである。

- (19) *Top* B4. 111a33-b4 では，〈種-類〉の一義的関連に対応して，〈種を持つもの^{パロニキモース}=種から派生義的に語られるもの-類を持つもの^{パロニキモース}=類から派生義的に語られるもの〉の一義的関連が述べられている。たとえば，「文法」-「知識」が或る文法について述べられるならば，「文法を持つもの」=「文法家」-「知識を持つもの」=「知識人」が或る人間について述べられる。
- (20) 拙論「アリストテレスの「第三の人間」論とイデア論批判」（『西洋古典学研究』xxxii, 1983）参照。
- (21) アリストテレスが人間の最大の類でもって，なにを考えていたかはどこにも述べられていない。或る研究家はそれを「実体」と取る。Cf. D. Ross, *op. cit.* lxxxiv; S. Mansion, *Le jugement d'existence chez Aristote*, 1946, p. 227, n. 39. しかし，いずれ見るように，範疇は「存在」述語の分類であるから，「実体」は一義的な最大の類でありえない（cf. *Met* I2. 1053b623-24）。換言すれば，それは事物の「名」でありえない（拙論「アリストテレスにおける「知識」*ἐπιστήμη* と「存在」*τὸ ὄν* のギリシア的系譜」（『科学と存在論』1980年）pp. 54-55 参照）。おそらく人間の最大の類は「物体」であろう。物体には類がないから，それはただ「運動する能がある」とか「熱，冷，乾，湿である」と特性から述べられるだけである。
- (22) この難解な句については古くから議論がある（cf. Philoponus, *In APo* 240. 24-241. 4）。

アリストテレスの *ὅπερ* の通常の用法は以下の四通りである（紛らわしいものは参照しない）。

(1) B *ὅπερ* A *ἐστίν* (B はまさに A であるところのものである)。——ほとんどの場合 A は B の類である。 *Top* Γ1. 116a25, 27, Δ1. 120b23, 24, Δ2. 122b19, 26, Δ4. 124a18, b8, 20, 21, 125a28, 29, Δ5. 126a21-22, Δ6. 127b15, 128a35, Z9. 147a14; *APr* A38. 49a18; *APo* A22. 83. a30, A33. 89b4.

逆に A が主語（まさに A がそれであるところの B）であるような構文もまれにある。 *Top* Γ1. 116a26; *EN* Θ3. 1156a17-18, I4. 1166a17.

(2) B *ὅπερ* A *τί ἐστιν* (B はまさに或る A であるところのものである)。——A *τί* は特殊な A，一種の A，一つの A を意味する。いずれを取るかは B によって決まる。 *Top* Γ1. 116a23; *APr* A39. 49b7-8; *APo* B4. 91b3 (*τὸ A ὅπερ τι*); *EN* Z4. 1140a7, H13. 1153b6-7; *Met* H6. 1045b1; *Phys* A3. 186b14, 15-16, 16, 17, 32, 187a8-9. とくに *APr* A8. 30a9-13 (*ᾧ τινί, κατ'*

ἐκείνου τινός, ὅπερ ἐκείνό τι) を参照.

(3) B ὅπερ A ἢ ὅπερ A τί ἐστίν (BはまさAであるところのものか、まさか或るAであるところのものである)。——これは(1)と(2)の複合形である。 *APo* A22. 83a7-8, 14, 27, 29.

(4) 同一性の ὅπερ。——*Top* Z4. 141a35 (τὸ εἶναι ὅπερ ἐστίν), Z8. 146b4; *SE* 22. 179a4 (τὸ ὅπερ τόδε τι εἶναι), 5 (ὅπερ Καλλίας); *Phys* A3. 186 a33-34 (ὅπερ ὄν καὶ ὅπερ ἐν), b2, 4, 5, 6, 7, 8, 10, 12, 13 (εἴπερ ὅπερ ὄν τὸ ὄν), 14, 33, *Met* Γ4. 1007a22, 23, 27-18, Δ15. 1021a28, Z4. 1030a3(?), 4, 5

私は問題の句を(3)にしたがって解釈する。異なる取り方については, cf. D. Ross, *Aristotle's Prior and Posterior Analytics*, 1949, p. 581; S. Mansion, *op. cit.* p. 225; La première doctrine de la substance: la substance chez Aristote, *La revue philosophique de Louvain*, XLIV, 1946, p. 356; J. Barnes, *Aristotle's Posterior Analytics*, 1975, p. 34.

(23) (a)——*Top* Z5. 142b27 「類は何であるかを表現することを意図し、定義のうちで第一に立てられる」。それに対して種差は付加的なものである (*ibid.* Z6. 143b6-8, Δ6. 128a23-26; *Met* Δ28. 1024b4-6).

(b)——*Met* Z5. 1030b20-26 「白(い)」がカリアスに、或いは人間に……ある、という意味においてでなく、「雄」が動物に、「等」が分量に、そしてすべて自体的に(なにかに)ある、と言われる意味においてである。ところでこれら(自体的にあるもの)は、これらがその属性であるところのもの(基体)の意義か名をふくんでおり、基体なしにはあきらかにされない。「白(い)」が人間なしにあきらかにされうるのに対して、「雌」が動物なしにはあきらかにされないごとくである。1031a1-4 「かくしてあきらかに本質にのみ定義がある。なぜなら他の述語にもあるとすれば、それはなにかを付加することによってでなければならないからである。たとえば「奇」の定義がそうである。なぜならそれは「数」なしには定義されず、「雌」は「動物」なしには定義されないからである」。

付帯性——*Top* A5. 102b4-9 「付帯性は……定義でも特性でも類でもないのに事物にあるものであって、何であれ同一のものにあり、かつあらぬことの可能なものである。たとえば、座っていることは或る同じものにあることもあらぬこともできる。白(さ)も同様である。なぜなら同じものがときとして白くあり、ときとして白くあらぬことはなんら妨げられないからである」 (cf. *ibid.* B1. 109a11-13, 21-26; *Met* E2. 1026b3ss.).

(24) このあとにもう一つの自体的なものが述べられる。「それぞれの基体にあっ

て、基体自体のゆえにあるもの」(73b10-11)。私はこれを、自体的なもの(b)の「述語と主語の本質関連」を、前件(原因)と後件(結果)の必然的関連に移し換えたものと解する。拙論「アリストテレスの論理学における転換性」(『哲学』第77集, 1984年) p. 13 参照。

- (25) 注(22)における(4)参照。
- (26) 範疇分類においては、実体範疇と非実体的範疇の区別が最重要であって、アリストテレスがつねにそれを意識していたことは明白である。「実体」以外の個々の範疇は、彼がまだそれを一定、不変に考えていなかったことは、本論のはじめに述べたように、*Top*と*Cap*の二箇所を除いた、圧倒的多数の箇所からあきらかだと思われる。しかしながら、「実体」以外のもの間に格差が観察される。まず、もっとも安定しているのは「性質」と「分量」であって、そのつぎに安定しているのは「関係」である。比較的安定しているのは「能動」と「受動」, 「場所」と「時」の二組である。もっとも安定していないのは「状態」であり、最後の「所有」は上記の二箇所以外には現われていない。したがって個々の範疇の数とその意味を確定しようとしても徒勞に終わる。